

# 三勲小だより

令和3年2月8日（月）



## <全校朝会（2月1日（月））の話（校内放送）>

明日、2月2日は「節分」です。豆まきをする人もいることでしょうね。校長先生は明日帰ったら巻きずしをたくさん作ろうと思っています。さて、「節分」は「季節を分ける」と書きます。この日を境に、暦の上では冬から春へと変わります。

これを見てください。この花は「ろうばい」といいます。「ろう」はろうそくの「ろう」、「ばい」は梅という字です。「ろう」のようにつやつやしてとてもいい香りがします。学校のどこに咲いているか見つけてみてくださいね。

さて、先日こんなお話を見つけました。「始まりは女兒の声『バスきましたよ』バトンは10年以上」という見出しです。それはこんなお話でした。

和歌山市に住む山崎浩敬さんは、病気で32歳の頃からだんだん目が見えなくなりました。そして46歳からは白い杖をもって一人でバス通勤をするようになりました。

目がよく見えないので、バスが来たこともよく分からないし、バスのドアを探すことにも苦勞していました。一人で通勤を始めて1年が経ったころです。停留所で待っていると、「バスが来ましたよ。」という女の子の声がしたそうです。続いて「乗り口は右です。階段があります。」その子はそう言って座席に案内してくれたそうです。その子は同じバスで通学する小学生でした。バスを降りる場所も同じで、それ以来、名前も知らないその子は毎日助けてくれたのだそうです。

やがて3年後、その子は小学校を卒業しました。でも、今度はまた別の子どもが助けてくれました。

山崎さんは、52歳のときにとうとう目がまったく見えなくなりました。でも、声をかけていた子どもが卒業しても次は別の子どもが声をかけるなどいろいろな子どもの助けは途切れることなく続きました。

「おはよう。」「寒いね。」子どもたちとの何気ない会話も山崎さんの毎朝の楽しみになりました。

山崎さんは、このお話を去年の「小さな助け合い」作文コンクールに出したところ、作品は最高賞に選ばれました。

助けていた子どもの一人は「お母さんに『困っている人を助けなさい』と言われたからやりました。当たり前のことです。」と言ったそうです。また別の子どもは、この経験をもとに、障害のある人を支える仕事に就きたいと思うようになり、「夢をもつきっかけをくれてありがとうございます。」と山崎さんに逆にお礼を言ったそうです。また、いろいろ聞いていくと、いつも助けている子どもがお休みの時にはピンチヒッターで別の子どもが声をかけるなど、多くの子どもたちが毎日山崎さんを助けていたことも分かりました。いいことがリレーのバトンパスのように受け継がれたのですね。

このお話は、コロナで困っている人が多い日本中に大きな感動を与えました。

さて、今度は、皆さんの番です。この頃「光る子賞」では、朝掃除やあいさつの他に、人や動物に優しくした人も表彰しています。この間も、いいことをした人がいました。朝、学校に来る途中で転んで泣いていた一年生のランドセルを持ってあげて学校まで一緒に来て、職員室の先生に伝えた人です。校長先生もその時に職員室にいましたが、その優しさに感心しました。最近いいことをする人が増えていますね。今日紹介した山崎さんのお話に負けないようなことも、まだまだこの学校にはきっとあると思います。いいことをしっかりしたり、いいことをしているお友達を見つけたりして、ますます「光る子」がいっぱいの学校にしましょうね。

数えてみると、今日を入れて6年生はあと35日学校に来たら「卒業」、ほかの学年の人は36日学校に来たら「春休み」になります。あと少しですね。今の学年でやり残していることはありませんか。やり残していることをきちんとして、今日のお話のようないいこともたくさんして、今の学年が終われるように頑張りましょうね。

